



Chōsen no mibun shakai: Nihon to no hikaku no kokoromi [Status society in early modern Korea: An attempt at comparison with Japan]

Citation

Howell, David L. 2011. "Kinsei Chōsen no mibun shakai: Nihon to no hikaku no kokoromi [Status society in early modern Korea: An attempt at comparison with Japan]." *Buraku mondai kenkyū* 195: 23-28.

Permanent link

<http://nrs.harvard.edu/urn-3:HUL.InstRepos:13041031>

Terms of Use

This article was downloaded from Harvard University's DASH repository, and is made available under the terms and conditions applicable to Open Access Policy Articles, as set forth at <http://nrs.harvard.edu/urn-3:HUL.InstRepos:dash.current.terms-of-use#OAP>

Share Your Story

The Harvard community has made this article openly available.
Please share how this access benefits you. [Submit a story](#).

[Accessibility](#)

近世朝鮮の身分社会―日本との比較の試み

デビッド・ハウエル

最初に申し上げておきますが、私は朝鮮史に関してはまったくの門外漢です。専門は日本近世社会史で、朝鮮史の専門的な知識は持ち合わせていません。にもかかわらず、なぜこの場で朝鮮史に関して問題提起を行うかといいますと、二〇〇九年三月にプリンストン大学に塚田孝先生がおいでになった際に、今回の国際円座でインドや中国との比較からの問題提起があると聞きまして、そうであるならば近世朝鮮との比較もあればよいのではと私が言ったところ、結局私自身が問題提起をすることになりました。そういうわけで、まったくの門外漢ですが、朝鮮史を見てみたいと思います。先ほど岸本さんは、身分的周縁研究の成果から外国史研究者は何を学ぶことができるかとの問いを出されましたが、私は反対に外国史を通して近世日本の身分的周縁を研究する者は何を学ぶことができるかということについて少し考えてみたいと思います。近世朝鮮の身分制を大雑把に見て、日本史研究者として示唆的な要素がないかどうか、言い換えれば有効な比較史の可能性があるのかどう

か、簡単に探ってみたいと思います。ここで朝鮮史を考えるのは、朝鮮社会をよりよく理解するためではなくて、日本史の方法を考える題材として捉えようとするものです。これから、レジュメにもありますように、最近出た英文による近世朝鮮史研究の作品をいくつか簡単にご紹介したいと思います。言いましたように、私には朝鮮史の専門的知識がまったくありませんので、朝鮮史研究者の成果を少しだけつまみ食いしているにすぎません。しかし、示唆的なことがいろいろあると思います。

広い意味の身分あるいは格式というのは、おそらく人間社会においてほぼ普遍的な現象だと思います。人間どうし、あるいは社会集団どうしの間に秩序が生まれ働くのであって、そこにいる人々はそれをごく自然に受けとめることが多いでしょう。そして、表の秩序と、多少隠された複数の秩序が併存することも普遍的な現象といえるかと思っています。例えば近世日本社会に関してもそれが見られます。村落社会では、持高による秩序、家柄による秩序、名主・組頭などの役職による秩序などが併存して、場合と状況によってどの秩序が効果的であるかが変わります。ですから、一概に身分を語ることはできません。複数の表と裏の身分と格式の秩序がどのように構成され作動するかを探らなければいけません。また、これが普遍的な現象であるだけに、近世の村落だけではなくて、都市社会でも、中世社会でも近

代社会でもおなじようにいえますし、ヨーロッパや東アジアなどでも複数の秩序が同時に作動しています。このように普遍的なものであるならば、何をもって近世日本をいわゆる「身分制社会」として位置づけることができるのでしょうか。比較史を試みる前に、その点をはっきりさせておく必要があるのではないかと思います。そこで身分的周縁論の成果からいえば、決定的な要素は法ではないかと思えます。法制化された身分的秩序があったからこそ、近世日本は身分社会であつたといえるのではないのでしょうか。武士身分、百姓身分、賤民身分などが存在して、他にはもちろん格式や集団内の広い意味の身分的秩序も存在していますけれども、社会集団を取り巻くあらゆる社会的・政治的・経済的・その他の力的関係を語る前に、まず法制化された身分を出発点にしなければ何も理解できないというスタンスが身分論の根本にあると思います。

法制化された身分制があつたということは、近世朝鮮と近世日本を比較するもつとも魅力的な要素だと思えます。身分の比較史といいますと、おそらく最初に頭に浮かぶのはインドとの比較だと思いますが、朝鮮の方がある意味では有効な比較対象かもしれません。しかし残念ながら私が見た限り、朝鮮社会史の歴史学的方法論や実証的研究の成果は、インド史のそれに比べてまだ初歩的な段階にあるのは否めない事実です。少なくとも英語圏の朝鮮史学会には、

後でボツマンさんの報告で出てくると思いますが、ニコラス・ダークス氏のような優れた研究者はまだ存在していません。ですから、これから申し上げる近世朝鮮における身分制については、研究の歴史の浅いことを念頭に置いていただきたいと思います。

では本題に入りましょう。まず朝鮮の身分制を大まかにご紹介します。一般的に四段階の身分秩序といわれています。いちばん上には王国の官吏を勤める貴族すなわち両班。朝鮮には、中国と類似した科挙の制度がありました。中国と決定的に違うのは、試験を受けて官吏になる資格を持っているのが、両班出身の者に限られていたことです。両班のもうひとつの特徴は、地域支配に経済的基盤をもったことです。そういう意味では、ヨーロッパなどのジェントリー——農園を経営する貴族——に似た側面が多少あるといえます。しかし朝鮮王朝の歴史の中で、中央に政治的基盤を持った両班と、地方に残されて、政治的影響力のない両班、という二つの大きなグループに分かれていました。朝鮮時代の政治史をごく簡単にいえば、如何にして地方の者が中央に基盤を作り上げるか、逆にすでに中央に政治的基盤を持った両班がそれを如何に保っていくかが、政治史の縮図といえます。両班の下には中人と呼ばれる中間層、いわば準エリートがいました。彼らは、通訳や医者や下級官吏などを勤めました。近世日本には、これに相当する身分集団

はないかもしれませんが、医者や儒者がもつとも近いのではないでしょうか。武士身分でも、町人身分でも、政治的権力を直接に持たなくても、権力者の周辺にいる集団として朝鮮の中人に似た人たちがいたといえます。ただ朝鮮では、身分としてそれが戸籍に反映されて、中人身分という法的身分が存在したことが大きな違いです。両班と中人の下に多くの人民がいました。それは良民すなわち庶民・百姓という身分でした。他の前近代の社会と同じように、良民のほとんどが農業を営んでいました。そして、彼らの下に最下層として賤民身分のいくつかの集団がありました。賤民に関しては日本に類似した点がありますが、やはり独自の論理が働いていたようです。今回は、賤民身分の全体像を描く研究者が英語圏にはないので、詳しいことは話せません。ただ、これからご紹介する研究の中には、奴隷としての賤民身分を取り上げているものがあります。その他には、中間層の中人を取り上げている研究が最近いくつかあります。

私が見た限り、英語圏における朝鮮史研究の現状は二〇一三〇年前の日本社会史の研究状況に似ています。といいますのは、今のところは構造論が多くて、具体的に身分集団がどのような関係を持っていたかなどについての実証的な研究は、ほとんど見られません。

これから四つの研究を簡単に紹介したいと思います。

最初に、ジェームス・パレイ氏の“*A Search for Korean Uniqueness*”という一九九五年に出た論文です。パレイ氏は一昨年（二〇〇七年）に亡くなりましたが、長年ワシントン大学で主に朝鮮思想史を教え、アメリカ朝鮮史学会の中心的な人物でした。彼のこの論文は、題名のとおり、朝鮮の特異性を探ることが目的です。その出発点としては、植民地時代の朝鮮では日本人による朝鮮史研究がほとんどであったことを指摘しています。その研究状況の中で、朝鮮が停滞した社会である理由・論理を見るのが主な目的となり、停滞から抜け出すことができなくて、結局日本の植民地支配に陥ることの必然性を説く、というよう文脈で朝鮮史が語られたため、再び独立をした韓国では植民地時代の歴史学を克服することがとても大きな課題になりました。しかし、その反面、結局ナショナリズムに囚われて、「ユニークな朝鮮史」や「進歩的な朝鮮史」が主流になったとのこと。彼はそれを踏まえてもう一歩新しい朝鮮史の可能性を探ろうと、朝鮮社会を大きく五つの特徴にまとめています。ひとつは、ここでもっとも大切ですが、朝鮮社会はすなわち奴隷社会であったということを指摘しています。この点については後で述べたいと思います。二つ目は、先ほども言いましたように、権力が両班という身分に独占された貴族社会であって、中国と決定的な違いがあったということ。三つ目の特徴は、両班の間での世代を超える

派閥の存続と王朝の長期性です。ご存知のように、朝鮮王朝は一四世紀の終わりから二〇世紀の初めまで五〇〇年以上も存続し、それ以前の各王朝も何百年も続いたという特徴があります。ですが、王朝が続いても、王自身の政治的権力は非常に弱くて、派閥に囚われがちでした。そのせいで両班どうしの争いが政治史や思想史に多大な影響を与えています。それが朝鮮王朝の大きな特徴です。ここで、日本史との比較の点からすれば、奴隷社会であったということがもともと大切だと思います。最後にジョイ・キムさんの博士論文を取り上げる際に、改めてこの問題に触れたいと思います。

お話ししたい二つ目の著書は、キュン・ムーン・ホアン氏の“*Beyond Birth*”という本なのですけれども、ホアン氏は朝鮮の中間的エリートのいくつかの集団について研究しています。中人というのは、先ほどこいいましたように、地方において、両班の下レベルで、通訳・医者・下級官吏のような仕事に従事した人たちです。その他に、郷吏つまり地方役人、武班つまり軍人、それから庶孽つまり庶子とその子孫、それから西北人つまり朝鮮北部の出身者、これらのことを取り上げています。西北人以外はすべて戸籍に残るいわゆる身分的集団として存在しています。ホアン氏の研究の狙いは、一八八〇年代以降の朝鮮末期に両班の政治的な独占力が弱くなって、中間層の人たちが政治の上

部にかかわることができるようになるのですが、それが現代の韓国社会にどのような影響を与えているのかを探ろうとするところにあります。それを日本の身分的周縁論から見れば示唆的なのは、中人のような中間層が戸籍に残って公的な身分集団として存在していたことで、日本には見られない現象ということに興味深いと思います。しかし、私は専門家ではないのでいえることが非常に限られています。が、ホアン氏の研究を読んで、ちよつと疑問に思ったのは、彼が描く中人像はかなり固定しており、各身分集団の間には流動性を欠けていることです。

次に、ユージン・パク氏の“*Between Dreams and Reality*”という本を取り上げたいのですけれども、パク氏は、朝鮮後期の一七世紀以降には、軍部がかなり弱って、実際に軍人として生活する人の数が減ったにもかかわらず、武科(軍部の科挙)の合格者数が非常に増えたという現象を追究しています。試験に合格しても、実際には軍隊に入らず、軍のポストを得られる可能性がないに等しいにもかかわらず、どうしてたくさん希望者が武科を受けたのかを調べているのです。パク氏の結論を簡単に申し上げますと、まず、政治的な影響力を得る可能性がほとんどないような地方両班が、他の中央への出世ルートとして武科を受けたと推測しています。軍人は両班より身分が低いだけども、ソウルに出て活躍する唯一の方法として、両班から軍人へ身

分を落として試験に臨んだという少数派がいました。それから、地域の良民の子供が試験に合格して学位をもつことで地域社会での自らの格式をよりよく示そうと、そういう目的で試験を受けたのではないかとパク氏は結論づけている。実際に合格しても生活は何も変わらないのですけれども、婚姻関係などをおして地域のエリートとの交流では有利になるということだそうです。

最後に、ジョイ・キム氏の学位論文“Representing Slavery”ですが、キム氏は朝鮮社会における奴婢、すなわち奴隷の状況について、文学作品から戸籍まであらゆる資料を通じて実態を追究しようとするものです。先にお話したパレイ氏の論文でも指摘しているように、朝鮮社会は奴隷社会であったにもかかわらず、研究者は従来「奴隷」という言葉を使って議論してこなかったのです。これは韓国の研究者でももちろんそうですが、日本でもアメリカでも同じです。しかしキム氏の議論では、奴隷制に他ならないのに、それを認めたがらないところが朝鮮史研究のひとつの大きな特徴であるということなのです。奴隷の実態に関しては一七世紀から一八世紀にかけてのピークの時に、人口の約三割が戸籍のうえでは奴婢（奴隷）として理解されていました。戸籍のうえで奴婢・奴隷となっているので、そういう意味では、奴隷の隷属関係は持ち主に対する関係であると同時に、社会全体に認められて、いわゆる身分的

集団として存在していたといえます。資料の限界もありますけれども、実際に持ち主の家においてその指示で働く奴隷もいれば、離れたところで職人として独自に生産し生活をする人たちもいたようです。それから、持ち主の場所から離れて独立した生活を営んでいるうちに、次第に名目上の持ち主との関係が弱くなって、事実上自由になるケースが少なくなかったようです。しかし、それでもいつまで経っても奴隷の本質は奴隷でありました。三代も四代も離れて、お互いに、自分の家が奴隷を持っていたこと、自分の家が奴隷であったことさえまったく忘れてしまつて、偶然に出会つてよく調べたら、実は奴隷とその持ち主の関係だったことが判明した、という文学作品が多々あります。実際にそういうケースもまっただけではないようです。ですので、奴隷制といつても、おそらくみなさんの頭に浮かぶアメリカ南部の奴隷制のような、集団で農作業をするようなものとはずいぶん違うのですけれども、しかし人を売買して、その人の生産力を少なくとも理論上では独占できたということでは、奴隷制に他ならない、というのがキム氏の主張であります。言い換えれば、アメリカの奴隷制とは違うのですけれども、古代ギリシャやローマの奴隷制とはそう変わらないという結論であります。キム氏は、パレイ氏の提案をうけてあえて奴隷という言葉を使っているということ、韓国の方ではかなり冷たい目で見られてい

るようですけれども、それは逆にいえば韓国史が従来のナシヨナリスト的な歴史学的言説から新しいナシヨナリズムに囚われない言説に移ろうとしている証拠であるとも思います。

残り時間が少なくなりましたが、最後に問題提起を行いたいと思います。朝鮮社会史の作品を読んで、日本史の研究者として示唆的なものがあつたかどうかということです。ひとつの大きなポイントが奴隷制の言説です。近世日本史の研究では、奴隷という言葉はまず使われません。ただし、近世を通して、とくに近世初期には、自由でない労働力があちこちに存在したことは一般的に認められていることと思います。とくに農村社会では、例えば名子だとか譜代だとか、旦那の家に隷属して、代々その家に仕える、住居・作業道具・労働の内容をめぐってほとんど自由が効かない人々が、地方によりますけれども、たくさんいたようです。身分的には彼らは百姓になると思いますが、労働や生活の自由がないということで、朝鮮時代の奴婢に類似しているといえるのではないかと思います。そこで、一つの矛盾というか、皮肉なポイントがあります。近世日本では、少なくともある地方において、とくに一七世紀から一八世紀にかけての村落社会では、奴隷とはいわないけれども、自由ではない労働力がたくさん存在していました。日常的な労働や往来・婚姻に至るまでの行動をめ

ぐって不自由でありました。しかし、やはり「名子」や「譜代」という表現で議論されるので、私たちは彼らを奴隷と受けとめないのです。逆に朝鮮の方では、奴婢・奴隷として捉えている人々は、実際には、労働や往来、日常生活の営み方をめぐってはかなり自由を持った人たちがたくさんいたようです。しかし戸籍では奴婢と位置づけられていたので、私たちは彼らを不自由な民として理解しています。実際の日常生活の状況として自由であるかどうか、逆に法的に自由であるかどうかという二つの側面があつて、奴隷制、その言葉を使うのがふさわしいかどうかかわらないですけれども、少なくとも奴隷制に酷似したものが近世の日本社会にも存在していたのではないかと、と朝鮮史研究が大きな問題を提供してくれると思います。さらにその延長で、身分的周縁論の研究は、最近都市史・都市社会史に研究成果が多いのですけれども、それに比べて村落社会の方の成果があがつていないのではないかと思います。自由であるかどうか、隷属している百姓身分の社会集団、村落内部の社会集団の研究を通して、日本の身分的周縁論をより豊かなものにできるのではないかと思います。